

業務最適化を目指しシステム統合に着手。 インテル® Itanium® 2 プロセッサを搭載した 日立アドバンストサーバ「HA8500」を採用し 新共同購入システムを構築

生活協同組合連合会コープネット事業連合(以下、コープネット)では、これまで各組合生協が独自に構築・運用を行っていた情報システムの統合作業を推進している。業務コストの削減とサービス品質向上を図るのが狙いだ。その第一弾として、日立アドバンストサーバ「HA8500」による新共同購入システムを構築。インテル® Itanium® 2プロセッサの性能をフルに活かすことで、強力な処理能力と発展性を備えた業務インフラを実現している。



生活協同組合連合会
コープネット事業連合
システム事業
システム開発部
部長
宮沢 裕之氏



生活協同組合連合会
コープネット事業連合
システム事業
システム管理部
次長
久保田 哲治氏



生活協同組合連合会
コープネット事業連合
システム事業
システム開発部
共同購入事業支援マネジャー
新井 利明氏



生活協同組合連合会
コープネット事業連合
システム事業
システム管理部
インフラ管理マネジャー
濱田 芳宏氏

生協の共同事業を推進し サービス品質向上に貢献

首都圏・北関東の地域生協を中心に、さまざまな共同事業を手がける団体として設立されたコープネット。宮沢氏は「高品質な商品をよりリーズナブルな価格でお届けするためには、業務効率化やコスト削減を推進することが重要です。そこでコープネットでは、商品開発や仕入れなどの共通業務を集約し、サービス品質の向上を図っています」と説明する。現在コープネットには、東京・埼玉・千葉・群馬・栃木・茨城の地域生協が参画。事業ノウハウの共有化や、物流・生産設備の共同利用なども推進している。

またもう一つの大きなテーマとなっているのが、これまで各生協が個別に構築・運用を行ってきた情報システムの統合化だ。

久保田氏は「業務のスピードと精度を上げていくためには、ITの積極的な活用が欠かせません。しかし各生協がそれぞれ自前のシステムを保有するのでは、コスト面でも運用面でも問題が多い。そこで共通化できる業務については、コープネットが主体となってシステム統合を行っていく必要があると考えたのです」と語る。

共同購入システムの 再構築プロジェクトに着手

その第一弾として選ばれたのが「共同購入システム」の再構築である。共同購入とは、生協が発行するカタログに掲載された商品を、近隣に住む住民同士がグループで購入するサービスのことだ。仕事を持っていたり小さな子供がいる女性にとって、買い物の時間を捻出するのは容易なことではない。しかしこのサービスを利用すれば、購入した商品を自宅近くまで配達してくれるのだ。このため忙しい主婦層を中心に、高い人気を獲得している。

共同購入システムの再構築に踏み切った背景を、新井氏は「ここ数年でデータ量が急速に増加し、旧システムの処理能力ではカバーしきれなくなってきました。このままの状態では各生協のシステム統合を行うのは不可能。そこで新たなシステム基盤を構築したいと考えました」と説明する。

再構築にあたって特に課題となったのが、夜間バッチ処理時間の短縮だ。

「旧システムではバッチ処理が終わるタイミングがギリギリで、もし何かトラブルがあると、翌朝一番の発注に間に合わない可能性もあったのです」と新井氏は続ける。

USER PROFILE

生活協同組合連合会コープネット事業連合

www.coopnet.or.jp

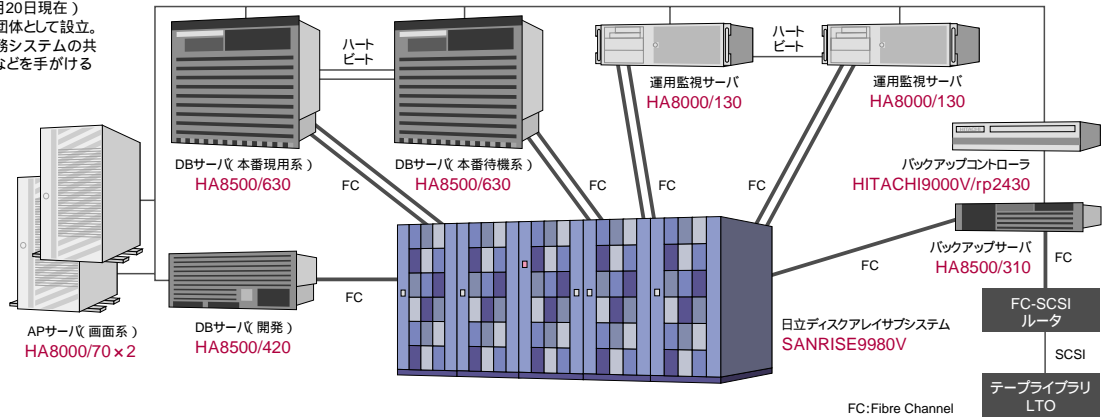
所在地 埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13

設立 1992年7月21日

出資金 41億4,500万円(2004年3月20日現在)

関東1都5県の生協の共同事業を行う団体として設立。商品の共同開発 / 共同仕入、各種業務システムの共同開発、物流・生産施設の共同利用などを手がける

コープネット 新共同購入システム概要



このため新システムには、大量データを短時間で処理できる高い処理能力が求められた。またもう一つポイントとなったのが拡張性だ。新共同購入システムはまず埼玉・群馬・茨城・栃木の4生協でスタートし、その後東京と千葉が加わるようになっていた。このため将来的なデータ量増加にも、スケーラブルに対応できるものでなくてはならなかったのである。

新たなプラットフォームに HA8500サーバを採用

コープネットでは、今回のITパートナーに日立を選択。濱田氏はその理由を「日立は我々の業務をよく理解し、適切な提案を行ってくれました。また充実したサポート体制が用意されていたこともポイントとなりました」と語る。

新システムを支えるサーバ・プラットフォームには、EPIC*テクノロジーを採用したインテル® Itanium® 2プロセッサ搭載の「HA8500」を採用。濱田氏は「今後の業務インフラを支える重要なシステムですから、長期間にわたって使い続けられるアーキテクチャの製品を選びたかった。その点インテル® Itanium® 2プロセッサ搭載のHA8500なら、安心して導入することができます」と続ける。

またHA8500は、既存資産の継承性という面でも大きな効果が期待できた。旧システムの業務アプリケーションはHP-UX上で稼働していたが、HA8500ならこれをそのままストレートに移行することができる。事実、今回の移行作業においても、「それほど苦労することなくスムーズに移行作業を進められた」（濱田氏）とのことだ。

バッチ処理時間を1/2以下に短縮 今後の拡張にも容易に対応

HA8500による新共同購入基盤は、期待通りの実力を発揮。

「事前に掲げた『バッチ処理時間を1/2以下に短縮』という目標を、見事に実現できました。HA8500のパフォーマンスには大いに満足しています」と新井氏はこやかに語る。

導入前にはバッチ処理とバックアップ作業に6～7時間を要していたが、現在ではバックアップ作業をバッチ処理の前後2回に増やしたにも関わらず、すべての作業を3時間以内で完了しているのだ。

「特に年末年始は通常一週間で行う作業を三日程度で行う必要があるため、処理が時間内に完了するかどうかが常に気を揉んでいました。

しかしHA8500の導入後は、こうした心配がまったく不要に。万一何らかのトラブルが発生した際にも、余裕を持って対応できます」と久保田氏は語る。確かさが求められるバッチジョブの運用には日立の統合システム運用管理ソフトウェア「JP1」が貢献。また本稼働開始以来、業務に影響するような障害もなかったなど、HA8500の信頼性も高く評価しているとのことである。

「今回の再構築はあくまでもシステム統合の第一ステップであり、今後のシステムのベースとなる信頼性の高いインフラを創り上げることが目的でした。そういう意味では大成功だったと言えるでしょう。今後も新しいシステムを順次開発し、さらなるサービス向上を追求していきたい」と宮沢氏は意気込みを語った。



* Explicitly Parallel Instruction Computing (明示的並列命令コンピュータ) HP-UXは、米国Hewlett-Packard Companyのオペレーションシステムの名称です。インテル、Intel、Intel Inside、Intel Insideロゴ、Itaniumはアメリカ合衆国およびその他の国におけるインテルコーポレーションまたはその子会社の商標または登録商標です。その他記載されている会社名、製品名は、各社の商標もしくは登録商標です。